

徹

七退

三!

おれた

おひら

## ■目次

エスパール・ママ

竜馬は生きている

プリキユア親鸞

隠蔽礼賛

撤退セヨ！

ライノー

## 『エスパー・ママ』

私の母は、予知能力者である。

夢に見た出来事が実現化することなど日常茶飯事、夢枕に立つてから黄泉路へ旅だった知人は数知れない。

一例を挙げるなら日本代表の大活躍に日本中が沸いていた二〇〇二年サッカー日韓W杯、ブラジルの優勝で幕を閉じたあと

「私はブラジルが勝つと思っていた」  
とその高い予知性能を告白していた。

つまり彼女の能力の弱点はただ一点、「予知対象を選択できない」。明日の競馬の結果が欲しい、と思っても彼女の夢に出て来なければ予知はできない。

だから役立たない……と思いきや、そんな彼女もごく稀に「いま欲しい情報」を当てることがある。

私は大学は京都大学を受けた。親友二人、ここでは「博士」と「閣下」と呼ぼう、

彼らと一緒に、受験計画を練った。京都は遠い。通えなくもないが、交通機関の雪による麻痺などのリスクを軽減するため、宿を取ることにした。スポンサーである各人の親の了解も取り付けた。親から見てもいつものズッコケ三人組と一緒に居るのは心強い。

学校でそんな話をしていると、また別の友人、これは「田中」と呼ぼう、彼がやってきて

「あー宿とるの？ 俺も取つとくかなあ……」

という。彼は儉約家だが、ただのケチではなくツボは押さえる男である。我々も勧めた。

さていよいよ試験前日、チェックインし、くつろいでいると田中が遊びに来た。近くの宿を取ったという。

「俺明日朝ここ来るからみんなと一緒にタクシーで行くか」

「ああそうしよう」

そして当日、いつも遊びに行く時は三〇分の遅刻は固く専用の「田中時間」を集合時間として教えられていた彼も定刻に来た。彼はツボだけは押さえる男である。

四人はタクシーに乗り込み、一路大学へ向かう。「京大といえば」いつもランド

マークになる本部時計台・正門前で、経済学部を受ける私と田中、それから本部を通つて北の理学部にゆく博士の三人が降りた。閣下はタクシーのまま、法学部の試験が行われる市内中心部の専門学校の建物に向かう。

この年、試験日程で学部間が揉め、ハンムラビ法典以来四千年の伝統を持つ法学部が、経済学部などという文系人の数学コンプレックスを逆手に取り無意味なグラフ・数式や恣意的な統計さらには大声による恫喝を得意とする詐欺師共に、その象徴とも言える時計台下法経一番教室を明け渡すという屈辱にまみれた。時まさに九年二月、バブル絶頂期ならではの異様である。

ちなみにこの年、合格者最低得点率で経済学部が法学部を上回る（つまり難関だった）というもちろん空前おそらく絶後の出来事も起きた。  
みな、狂っていた。

田中は肝の座った漢で、不安に畏れ戦き小鳥のように小刻みに震える私に向かつて

「おい、あすこを見ろよ。テレビカメラが来ているぜ」  
関西のTVニュースにおける大学受験模様といえば京大の法経一番が最も絵になる。

まったく余裕がなく生返事の私を捨て置き、彼は髪の設定に余念が無い。あまつさえ、

「しまったなあ、もうちよつとエエ服着てきたらよかった」

と宣った。普段着の私は呆れ果てたが、その余裕が田中らしい、と肩の力が抜けた。友人にはどのような友人であれ、そういうリラックス効果がある。いや、リラックス効果がある知人のことを友人と呼ぶのだろう。

果たして教室に入ると威圧感のあるテレビカメラが各社何台も入っており、教壇から我々受験生を睥睨して辟易した。田中を見ると、髪をセットしていた。

こうした緊張のうちに一日目は過ぎた。一日目に数学があり、理学部の博士はもちろん、文系学部ながら共に数学の得意な閣下と田中は夕食すぎまで答え合わせなどでおおいに盛り上がりつつあった。私もあまりに苦手なそれをなんとか誤魔化した手応えがあつたので、ヘラヘラしていた記憶がある。

二日目もそれぞれ力を出しきれたらしく、終了後集合した時には各々晴れ晴れとした顔だった。今の子なら事前に干支チェックを打ち合わせて梅田の居酒屋でも発泡酒で乾杯するのだろうが、激闘で疲労困憊だった我々は、ラーメン一杯喰わず

そのまま帰宅した。

当時は大学入試とは、人生を左右する一大事だと思い込まされていた、極めて不幸な時代だった。

さて帰宅した私を出迎えた母が開口一番言った言葉は、

「和ちゃん、テレビ出てたで！」

「ホンマに？ 田中は？」

「田中君は知らんなあ」

ま世の中そんなもんである。

「ビデオ録ついたらよかった！」

「要らん要らん」

夕食はトンカツであった。今か。

モソモソと食べだすと、満面笑顔の母が待ちかねたように話します。

「久しぶりに私の予知能力が発揮されたで！」

「……またですか」

「夢を観てん！」

「どんな」

「昨日の夜、閣下君のお母さんから電話があつて、『もう心配で心配で』と」

「おぼちゃん心配しいやしなあ。お大事の長男やし」

「そこで私は言うたんや。」

『心配要りません。私は夢を観たんです。あれはきつと正夢です』

「でた」

「『そう、男の子の後ろ姿が三人、時計台に向かつて京大の門をくぐつていく、そんな夢を……三人揃つて、合格です!』」

よくマンガ・アニメで「心理的ショックで食べかけた食物をポロリと落とす」という描写があるが、私はこの時初めてそれをした。

「……おかあさん……」

あのね、」

かかくくしかじか

「……えつ……ということとは……」

「はい……その三人は、現実においては、ぼく、博士、そして、田中です」

「ギャーーーーーッ!」

で、電話掛けて間違えましたつて言わな!」

「アホなことはせんでええ!!」

一瞬、母がエスパーではないことを祈ろうかとも思ったが、それが正夢であるなら僕は合格するので、そのままにした。

ごめん、閣下。

そして我が母はやはり、エスパー・ママであった。三人受かって、一人落ちた。

しかし！ 閣下の名譽のため言うとは彼はその後猛勉強、天下の東京大学に入学し、北の大地・札幌で就職して地元の名士の一人娘をゲット、義父母に若様婿殿と床の間に飾る勢いで大切にされ、幸せな人生を歩んだ。

大学入試なんてどうでもいいのだ。

ましてその結果の予知など。

よくこうした超常の力を授ける仙人・老師の類が

「その力、みだりに使ってはならぬぞ！」

などとお説教を垂れるが、全く納得である。

あなたの近くに居るその人も、「紙一枚一ミリ持ち上げるのが精一杯なサイコキ

「ネシス」や「好きな人に今日の天気だけしか伝えられないテレパシー」を持つ、「残念エスパー」かもしれない。

世界は不思議で満ちている。

## 『竜馬は生きている』

件の田中の話である。

彼は歴史が好きだ。昭和天皇崩御の折、高校生にもかかわらず、新聞社出版社から一斉に出された「昭和を振り返る」的な大部の写真集を小遣いで買い求め、それを飽くことなく読み込むほどである。

歴史好きの常として彼も特に戦国時代そして幕末を好み、なかでもヒーローは、おなじみ、坂本龍馬である。

ちょうど八六年には小山ゆうのマンガ『おゝい！竜馬』が連載開始、コミックスが図書館に置かれるや奪い合いになる人気作になっていた。もちろん彼は先んじて名作・司馬遼太郎『竜馬がゆく』を読破していたので、

「まあこういう設定（竜馬、武市、以蔵が幼馴染）も子供たちにわかりやすくするには必要なのかな」

などとうそぶいていた。  
そういう時代である。

竜馬ブームは何年かおきに訪れる。

雄藩とはいえ因習にまみれた田舎を飛び出す勇氣、最新の船舶を駆り仲間と貿易を志す先見性、政治経済の巨頭と胸襟を開いて語り合う人間の魅力、しかも早世して老醜を晒さず誰からも恨まれない。なによりもその人生には「自由」という通奏低音が流れており、特に男の子であるならば自動的に憧れてしまう。

むしろ彼のような傑作がいるからこそ、日本の若年男子には奇妙な「参謀志向」とも言うべき「責任や決断は誰かにまかせてその横に侍り知恵だけを出す」というポジションをやたら取りたがり（『三国志演義』の諸葛亮の異常な人気を観よ）、優秀になればなるほど決断を下す政治家ではなくその決断を唆す、あるいは手足となつて実行する行政官僚を目指すという変態的屈折、逆転現象が起き、しかもそれを誰もおかしいと思わない。

いや、元々そのようなメンタルの国民性であるからこそ竜馬、竜馬ともてはやされるのかもしれない。

竜馬自身はともかくとして若き日の私はこの歪みをおかしいと思っていたので、田中のように優秀な男が「竜馬が竜馬が」と言うたびに「君は大久保や桂であらね

ばならぬのではないか」と疑義を呈していた。むろん馬耳東風。恋は盲目である。

その日も下校途上、なんの拍子かまたそのような幕末志士伝になり、田中が恍惚とした表情で竜馬賛歌を謳い上げるので思わず、

「まあしかし彼は雄藩同士を繋ぐ自分の重要性を理解していなさすぎる。それが隙を生み、暗殺に繋がったんだ。この迂闊さは所詮その程度の人物だってことだ」などと厨二病丸出しの上から目線で論評を加えてしまった。すると並んで歩いてきた田中が不意に立ち止まった。振り返る私に向かって目に涙をいっぱい溜めて、

「竜馬は……」

竜馬はおれの中で生きてるんや!!」と絶叫した。

突然のことに私はまともな反応ができず（謝るのもおかしい）、口をパクパクさせただけだった。

話はこれだけである。

しかしこの一場面は私にたいへん重大なインパクトを与えた。

つまりそれは、「人はそれぞれの世界を生きている」という実感である。

田中の世界では竜馬は西郷や桂などものともしないスーパーヒーローであり、私  
の世界では彼らとは違うカテゴリの、いわばコーディネーターである（もちろん優  
劣はないが）。

どちらが正しい・間違っているというわけではなく、ひとつの「事実」を二人は  
そう解釈する、というだけのことである。

そして我々ひとりひとりの「世界」は、そのような解釈の膨大な積み重ねによっ  
て成り立っており、つまりひとりひとり、全く違う「世界」を生きている。

こう書くと、さもあたりまえのことを、とお叱りを受けそうだが、我々はこの  
「あたりまえ」をなぜかいつも常に、簡単に忘れ去る。

舞台の書割のように固定された「世界」の中で、「ぼく」や「あなた」や「彼」  
「彼女」が泳いでいる、そういうイメージを抱く。

現実は逆で、「ぼく」や「あなた」がひとりひとり書割を背負って歩いている。  
たまにその書割が重なった時に、その重なりがそれぞれにおいて違う役割を果たし  
ていると、私と田中のような衝突のドラマが起きる。

人間はどこまで行っても「ひとり」であり、書割の重なった縁起でもって誰かと繋がったり、離れたりする。

そのイメージはとても孤独なようで、しかしいつでもどこでもだれとでも、書割さえ重なれば「ともだち」になれるという非常に賑やかなイメージでもある。

またすべてが解釈に依存する、という感じ方は、「不安定」であるかもしれないが、逆に「不安」を解消する。自分の解釈は、自分の解釈であり、世界は「自分にとっては」そのようであって、「間違っている」などということは原理的に起こらない。

竜馬は田中世界では生きているのだ。

大阪の男の子にとって一番の褒め言葉は「おもしろい」であるが、私にはそのセンスは無いと早々に悟り、ではどう褒められたいかと考えれば「かしこい」であった。憧れは分析から始まる。幸い親のおかげで進学校から大学まで進ませて貰って観察した結果、「かしこさ」とは端的に言えば

「自分を離れて観察できること」  
これに尽きる。

先ほどの例で挙げると、「わたしの世界」の他に、「田中の世界」「山田の世界」「鈴木の世界」がある、という感触を、できれば常に、それが難しければ難問に直面した時だけでも、得られるかどうか、手放さないかどうか、その一点である。その視点があれば、話し合いや互いの熟考を繰り返せば、いつか「重なり合い」の部分に妥協や融通が発生し、問題は解決に向かう。

問題を解決できる人が「かしこい」人であつて、何かを覚えていたり、知っていたりする人ではない。

またもちろん、その「重なり合い」を大切に作る気持ちをこそ、友情や愛情、思いやりや優しさというのであろう。

最先端のラディカルな量子論の世界では、世界は「すべての状態が重なり合っている」過去も現在も未来も含めて、という。

たいへん刺激的なイメージであり、昨今SF系の素養のあるクリエイター達はこれを用いて様々な世界間を右往左往するような物語の構築に熱心である。

しかし難しい理論や数式を理解せずとも、私たちは薄々気づいてはいるのかもしれない。

私の世界とあなたの世界が違うことを。  
しかしそれらは重なり合っていることを。

「孤独」とは状態のことではなく、関り合いを避けるという意志または態度のことであり、そうしなければ、人は孤独ではない。逆にそうすれば大都会のコーヒーシヨップの喧騒の中にも孤独は生まれる。

かくして、私の世界観はコペルニクスの転回に及んだ。田中のように何事にも真摯でそれによつて「世界を持つ」人を敬し、あの時のように「余計なちよつかいを掛ける」という関与をすることで何かがスパークして何かが生まれる。

自分一人では何も起きない。かといつて世界から何か入手しようとばかりしていても、何も手に入らない。

私は今日も駄文を書く。読む人は数人か、多くても数百人である。なぜそんなことを続けるのか、という問いは自分に対してでも野暮であるが強いて答えるなら、私の世界と誰かの世界を重ね合わせるためであろう。

そこにきつと何かが生まれている。  
それでいい。

そう考えれば確かに、竜馬という人は誰かと誰かを重ね合わせる名人であった。西郷と桂が重なればそこに巨大ななにかが生まれる。だから、「そのままの冷たい世界」を欲する臆病な人々にとつて、これほど危険な存在は居ない。

しかし暗殺（を命じた）者は「かしこく」なかった。竜馬は殺されることで一二〇年後の少年の心の中にさえ生き延びてしまった。そしてその中で今日も様々な人を重ね合わせている。

彼の革命はむしろ殺された時から始まったのかもしれない。チェ・ゲバラのように。人間は同じ間違いを何度も何度も繰り返す。まるで間違いではないかのよう

に。社会が息苦しくなった時、ひとは竜馬のような「おのれの感じるままに生き、ひととひとを重ねあわせてくれる」人物を求めるのであろう。そんな人になれぬまでも、そんな人が現れて誰かと繋いでくれて、そこに日常に大きな風穴を開ける化学反応が起きることを願う。

逆に言えば、彼を求める気分があるうちはまだ大丈夫。心に蓋をして、他者と関わらず、密閉された部屋で画面の先の文字と数字だけを追う世界になれば、彼は単なる偉人の間を泳ぐチリチリ毛のホラ吹きになり、誰も憧れなくなるだろう。

竜馬はまだ、生きています。

## 『プリキュア親鸞』

国民的TVアニメ『プリキュア』シリーズをご存知だろうか。この情報化社会にアンテナを高く高くお伸ばしの諸兄諸姉には釈迦に説法であると思うが、念のためご説明申し上げると日曜朝八時半よりテレビ朝日系列で放映されている、いわゆる「変身少女もの」である。シリーズは第一作『ふたりはプリキュア』以来、八シリーズ〇シーズンを数え、二〇一三年現在も最新作『ドキドキ！プリキュア』が絶賛放映中である。

小生ゲームの仕事をしていたので当然、初代『ふたりは』が大評判を取ったことは小耳に挟んでいた。しかし

「おっちゃんもうそういうのはモモ、マミ、ペルシャ、エミ、ユーマとですね」などと『クリイミーマミ』関連グッズだけで「アニメイト」の会員カードのスタンプが次々に埋まっていった日々を思い出し遠い目をするばかりで、「ああいうものであろう」と思い込んでいた。

とんでもない間違いであった。  
人類は、進歩する。

日曜朝になるとツイッター上であまりに五月蠅いものであるから「どれ」と『ハートキャッチプリキュア』の確か第五話を観た。

「……これは！」

テーマはラーメン店の親子、お父さんが商売繁盛で忙しく、寂しくなった息子が拗ねる、そこに付け込む悪がその萎れた「心の花」を使って怪物を出現させ、それに対しヒロイン・つぼみとえりかがキュアブロッサムとキュアマリンに変身、最後は見事浄化、男の子も父と和解する……

なんというドラマ性。

絵的にも名手・馬越嘉彦が描くキャラクターはシンプルでありながらであるがゆえに表情豊かで楽しくよく動く。

アニメは動いてなんぼである。

また往年の魔法少女達が万事「魔法」で解決するのは違い、プリキュア達は基本的に拳を奮って戦う。ロボットアニメやアクション映画でさえ激減した「殴る・

蹴る」の活劇性は小脳をくすぐる。

すっかりお気に入り、シリーズを観続けているうちに

「……これは全ての『プリキュア』を観直さねばなるまい」

と決意、『ふたりは』『MaxHeart』『Splash☆Star』『ㄥ』『ㄥ Go!Go!』『フレッシュ』『ハートキャッチ』『スイート』『スマイル』各シリーズ（放映中の『ドキドキ』を除いて）全四三七話、映画単独編九本・オールスター編五本、レンタルビデオ店を時にハシゴして全て観た。

その結果得られた結論が、

プリキュアは親鸞である。

という事実である。

浄土真宗が日本最大の信者数を抱える大宗教であることはご存知であろう（約二万カ寺・一二〇〇万人）。ドラマ性が高い、キャラがいい、アクションが爽快、そんな特徴は表層に過ぎず、実に「親鸞である」からこそプリキュアはこれほどの人気、つまり信心を集めるのだ。

以下詳細に見ていこう。

キーワードは「縁起」「他力」「悪人正機」「信仰からの自由」「方便」である。

・プリキュアは「縁起」である。

プリキュアに選ばれたヒロインたちは（若干の例外を除き）ほぼ単なる交通事故のごとき「巻き込まれ」である。

美墨なぎさがキュアブラックに変身したのは「たまたま」メップルという妖精が降ってきたからに過ぎず、血統的に勇者の血筋であるとか、なにか天才的な能力者であるとか、そういう「理由」は一切無い。

しかもご丁寧毎シリーズ、センター・ヒロインの友人たちが次々に巻き込まれてプリキュアに「させられていく」。ここにも「理由」はない。世界中から異能者が集められることはなく、見えないところに星型の痣があるわけでもない。

しかもまた素晴らしく仏教的な諸行無常であるのが、彼女たちは当初若干の戸惑いを浮かべるものの二、三週もすればまるで生まれた時からプリキュアであったかのように振舞い出す。ネコに首輪をつけた時のような自然体、これぞまさに「犀の角のように一人歩め」ではないか。

そこには環境の強制に苦悩することも、自己実現の障害として否定することも見られない。もちろん逆にプリキユアであることを濫用・悪用して現世利益的にの上がろうという我欲もない。

それぞれはそれぞれの「あたりまえの日々」をいままでと同じように繰り返しながら、プリキユアもやる。

魔法少女・変身ヒーローといえは超常の力を持つ・あるいは異形の者となった自分のアイデンティティに悩む、のが定番であるが、そこがすつぽり抜け落ちている。まるでそんなことを悩むのは無意味であると言わんばかりに。

この差別意識の無さ、与えられたものを受け入れる「受」のところが、これぞ真宗に限らず仏道そのものであろう。修行僧の托鉢姿を思い出されたい。

さらに縁起的で印象に残るのが「目的意識の無さ」である。

一応、「パルミエ王国復興のためにドリームコレットを探す」など、探しものや防衛すべきもの、という目的はあるはずなのに、毎シリーズ毎回真面目に取り組んでる描写はほとんどなく、たまーに申し訳程度に虫取り網を持って「○○やーい」と近所をうろつく程度である。

また依頼主である妖精たちもその模様に特にイライラするでもなく一緒になって遊んでいたりする。

なんという「人生」！

そう我々は何かを探して、何かを求めて、何かを守って、生きているのではない。ただ生きているから、生きているのだ。

ブルーバード。

・プリキュアは「他力」である。

さて、彼女たちは簡単な念仏（「プリキュア！スマイルチャージ！」など）を唱えると「キュア○○」に変身する。「ピルマピルマプリンパ パパレホパレホドリミンパ」などといったサンスクリットの真言を唱える必要はない。大いなる民主化であろう。

そして名告りを挙げるのだが、それは（例外もあるが）オートマチックであり、「自由意志」はそこには無い。

「太陽サンサン熱血パワー！」

「キュアサニー！」

と絶叫しておいてから

「えっ!? なにこれ!?!」

と自分自身にうろたえる。毎シーズン初頭のお約束である。

しかしこれこそが人生であろう。

我々は親を性別を人種を国籍を選べない。キュアサニーに生まれればキュアサニーでしかなく、同じオレンジでもキュアルージュには一生なれないのだ。

ここに「自由意志」によつて「選択」を繰り返して、自らの人生を切り拓く……という近代が我々に植えつけた「嘘」を見事に解きほぐしてくれている。

さて、悪を浄化するためには必殺技を使う。この必殺技も、原理もわからなければ力の源泉も不明のままである。ただ

「スパイラル・ハート・スプラーツシュ!」

と叫べば何かが出て、事が成される。

まさに阿弥陀仏の救済以外の何物でもない。

多くのシーズン途中、プリキュア達は増大する敵の力に対抗してパワーアップす

るのだが、そのパワーアップも片眉を剃り落とす山に籠って鍛えるとか、最新科学の力で新兵器を開発するとか、そういう描写は一切無く（一応特訓や試練はやることはやるがおおよそ形而上的で、こんなもので物理的戦闘能力が上がるとは到底思えないものばかり）、

「ペガサスよ！」

とかなんとか叫ぶと新しくペガサスがやってきて以前より強い光線が放たれる。

馬鹿馬鹿しいほど阿弥陀仏ではないか。

シリーズや映画によつては最終決戦にてプリキュア達が地球を超えるサイズにまで巨大化、あまつさえ羽根や輪を装備し光り輝いて聖化、まさに「仏」そのものとして巨大な敵をまるごと浄化する。

これが仏教説話でなくて何か。

しかもたいてい「強く念ずる」だけで、筋トレもなければドーピングも無い。

これを親鸞と言わずして何が親鸞か。

・プリキュアは「悪人正機」である。

対決する悪は、（シリーズによつて微妙に違うのだが）、幹部が出てきて自然物や時に人間の心を使つて、魔物を召喚する。これに対しプリキユアは拳である程度ダメージを与えたあと、光線技にて「浄化」する。

決して「破壊」や「消滅」もちろん「殺生」ではない。

しかるに悪は失敗を繰り返しても何度も何度もプリキユア達に挑み、そのたびに負ける。工夫もあまりなく、思いつきと偶然に頼つて毎回同じように敗れる。この様はまさに

「わかっちゃいるけどやめられない」（植木 一九六一）。

親鸞といえは代名詞のように話題になるのが「悪人正機」、

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」。

悪人、つまり我々凡夫は、決して悟りを開いた善人になれるわけではない。

しかし、であるからこそ、魂にとつてよろしくないことを「やつちまった」、その瞬間その瞬間に反省し、苦悩し、その苦の中から湧き上がるのが

「……どなたかお救いください」

という本当の意味での信仰心である。であるからこそ、悪人は往生できる。

前述通りプリキュア達はまさに阿弥陀仏となり、迷妄する悪人に対し無償の救済を繰り返し与え続ける。悪人の存在を否定もしなければ、その存在を憎むことすらしない。そして最終的には、（おおよそ）往生をとぐ、のだ。

あまつさえ、せつな（キュアパッション）とエレン（キュアビート）に至っては元・敵幹部である。

真に望めば誰でもプリキュアになれる。

これぞ悪人正機、これぞ親鸞である。

・プリキュアは信仰から自由にする。

ここは説明が少々必要かもしれない。

弟子・唯円が

「阿弥陀様がお救いくださるというので念仏を一生懸命唱えるのですが、どうにも

『これで救われた!』という喜びが湧き上がって来ません」

と率直な告白をした際、当の親鸞の答えはこれ、

「ワシもや」

親鸞らしきの象徴としてよく取り上げられる『歎異抄』の逸話である。

実にいいかげんというか頼りないように思える話であるが、そもそもでは、「ワシは違うね。ものすご悦ぶよ」

という師について、なにか得ることがあるのか。そのようになれない自分を悔やみ、  
貶め、あてどもない厳しい修行の旅を続けさせるだけではないのか。

プリキユア達は決して驕り高ぶらない。ボランティアで戦い続けることを誇って、  
聖人君子然と振舞ったりも絶対にはしない。

わかったようなふりをすることを仏教では「無明」というが、それが無い。  
いつも普通の女の子に戻り、またドジや失敗をやらかす。

プリキユア達だつてあんなに「ふつう」なんだから、私達もそうであつていい……  
観ている子ども達はそう安心するだろう。

唯円のように。

もう一段深読みをする。

「悪人正機」に観られるように、親鸞が思う「信仰」とは、「信ずることに疑いが

起きた時にもう一度信じ直す」この不断なき運動・行為こそがそれであって、念仏を唱える度に法悦に浸れるならそれは、酩酊もしくは条件反射に過ぎない。

ということとは、親鸞の信仰では決して救われない。その瞬間救われてもまたいずれ、魔が襲うからである。しかしそれなら、またそこで信じればいい。

救われないということに気づくことで救われ続ける、という時間軸を内包した四次元構造を持つ。

どのシリーズもプリキュアには「目的」が決まっている。それが達成されるとプリキュアである必要はなくなる。

(注 ただし返上する必要もないようで、今までのところ全員がプリキュア変身能力をキープしたままである)

人生についての苦悩を突き詰めていけば、  
「どうせ死ぬのに生きている」  
という命題になる。

プリキュアはこれを身をもって体現している。目的が達成されプリキュアでなくなるために、プリキュアでありつつづけるのだ。

それが最も色濃く描かれたのが『5』で、妖精ココとセンター・のぞみ（キュアドリーム）が恋仲に陥る。二人は、目的が達成されれば別の世界で生きなければならぬ。そこに苦悩するのだが、しかしそれでもプリキュアであること、戦うことを止めない。

これぞ人生ではないか。

我々は救われないし、いずれ死ぬ。

しかしその瞬間その瞬間、「よきこと」への信頼を実感し、「生きている」という喜びを味わうことができるのなら、それでいいではないか。

信仰が（プリキュアになることが）救いをもたらしてくれているわけではない、しかし、時に応じて信じ続けること（プリキュアであり続けること）が幸福を生み続けるのである。

・プリキュアは「方便」である。

最後に、これらすべてをひつくるめてプリキュアシリーズそのものをメタ視点で見れば、それが「方便」であることがわかる。

画面を一目観てお分かりのように、これは

「バンダイが女兒向け玩具を販売するための販促アニメ」

以外の何物でもなく、であるがゆえに歴代、機能的必然性が感じられないケツタイなアイテムで変身を余儀なくさせられ、放映中にもどこをどう使っているのか皆目わからないキテレツなアイテムが続々投入される。もちろん、そのレプリカ玩具を売るためだ。

話の筋も、メイン購買層（視聴層ですらない）である未就学から小学校低学年女兒をターゲットイングしており、「わかりやすさ」が何よりも優先され、大人が楽しむには少々単純すぎるケースも多い。

可愛らしいキャラクター・デザインも妙な虫が付かないよう徹底して性的な匂いを脱臭しており、一四歳なのに全員（『フレッシュ』の変身後を除く）胸はこれでもかと平板であり、夏に海に行っても水着にもならない。（過剰なほどお色気を振りまく例えば『エヴァンゲリオン』のレイ・アスカ・マリと比べられるがよい。同じ一四歳である）

製作は伝統ある東映、であるがゆえに枚数制限（コスト管理）が厳しく、絵で圧倒するというマニア向けの楽しみ方もほぼできない（たまにはある）。

しかし、だからこそ良い。

日本の芸術といえど俳句に盆栽・書道に茶道、ミニマリズム極まる厳しい制限の中でいかに華を咲き誇らせるかを競い合うものであり、この伝統に則っている。

『プリキユア』である限り、複雑怪奇なストーリーで途中離脱させられることはありえないし、無残に人死が続発するトラウマ経験も（ほぼ）無い。

その安心の上に、各シリーズはまったく異なったテイストを持っている。シリーズディレクター（監督）、シリーズ構成（脚本統括）、キャラクターデザインのコア・スタッフが毎回変わることで（再登板はある）、どのプリキユアも个性的で、それぞれにファンが付く。外見も構造もなにからなにまでそっくりな『ふたりはMH』と『SS』でさえ、数話も観ればまるでテイストが違うことがおわかりになるだろう。

つまり、

「『プリキユア』を作る」

という「方便」に乗っていきえすれば、なにをしてもいい、なにを描いてもいい、どんな思いの丈を伝えてもいい。

マイケル・ジャクソンに『Billie Jean』という名曲がある。耳にしたことの無い

現代人は存在しないだろう。しかしこの傑作、何が主題かといえ

(エッチする時はホンマにこの人でええか) 「二度考えよ！」

(安富 二〇一三)

である。ビリーさんに「お腹の子は貴方の子よ」と突然告げられ後ずさる男(この動きがムーンウォーク)。だがそのような子どもは両親から溢れる愛を受けられる可能性が低く、それはとてつもない不幸である、と。

こんな「お説教」を喜んで聞く若者は居まい。しかしMJの圧倒的なダンス・歌唱・音楽に乗っていると、聴かずして聴いてしまう。

これが、「方便」である。

同じように『プリキュア』という方便の船に乗ることで、愛、友情、勇気、情熱、努力、想いやり、将来への夢……様々な「善きもの」が子どもたちに今日も伝えられている。

「勉強しなさい」と言われるよりも、ほのか(キュアホワイト)、かれん(キュアアクア)、れいか(キュアビューティ)などの才媛達の颯爽たる姿、仲間に信頼される姿、難問を頭脳で解決する姿を見せられる方が、宿題の筆も進むというものだろう。

親鸞においては念仏という方便をもつて本来の救済への扉が開かれる。同じように、『プリキユア』という方便を用いることで、クリエイター達と子どもたちに「生きる力」への扉が開かれるのだ。

——以上、いかがか。

『プリキユア』という現代日本を代表するコンテンツと、『親鸞』という日本の誇る思想家・宗教者との濃密な接点がおわかりいただけただけだと思う。

つまり、プリキユアは親鸞であると。

であるならば次は世界征服いや、世界への布教であろう。このように素晴らしいものを二つながらにして知らしめ、阿弥陀様の威光を全地球にあまねく輝かせなければなるまい。

そこでわたくしは考えた。

こう見えても電機メーカーとゲームブランドでいくつもの自信作を不発に終わらせてきた豊富な経験がある。頭を悩ませるまでもなく、手に染みついた出身電機メ

ーカーの得意技が炸裂する。それはツイーンファミコンにオープンレンジ、「くつつけたらしまいや」。

『プリキュア』には毎回モテイフがある。『フレッシュ』ならダンス、『スイート』なら音楽。ならば来年の新作『プリキュア』で、仏教をモチーフにすればよい。題して、

『南無！プリキュア』

今度のプリキュアは六人組である。最近は戦国武将や連合艦隊でさえそうなるぐらいだから、鎌倉新仏教六人衆を美少女化しても仏罰は当たるまい。

センターはもちろんこの人、本願寺ラン。あらゆる煩惱に塗れる悩み多きしかし元氣一杯の中学二年生だ。ひよんなことから悪魔企業「マール」に追われ人間界にやってきた妖精スジャータと知り合い、キュアアミダに変身する。

マールは遺伝子組み換えや核技術を盲目的に推進することで悪気もないのに人類を滅ぼそうとしつつある絶望のグローバル多国籍企業である。

立ち向かう仲間とともに読経に汗を流した、龍大谷学園の「仏・倶楽部」（通称ブックラ）の面々。信頼する優しい先輩・源空ねん（キュアジョード）、無口な婦

国子女・ミッチー永平（キュアザゼン）、などなぞの得意な優等生・西さかえ（キュアキツサ）、踊りに夢中の河野トキ（キュアダンス）、そして最後に仲間になるのは跳ねつ返りのトラブルメーカー、久遠レン（キュアホツケ）。変身の呪文はもちろん、

「プリキュア！南無阿弥陀仏！」

（キュアホツケだけいつも語尾が合わない）

悪の三幹部はガンジン・ローゼス（いけないアングロサクソン）、ファツQ（厨二IT小僧）、政子（タガメ女）ぐらいでよろしかろう。

物語中盤ではマールを更にご利用しようとするアメリカ軍産複合体やロスチャイルド財閥、アラブやロシアのマフィア富豪まで出てきてさあ大変。プリキュア側にも二人のお姉さん、天才肌のヤンチャ娘・高野ソラ（キュアシンゴン）と超秀才の比叡もすみ（キュアテンダイ）が加わって（ちなみにこの二人は昔デキてて、いま喧嘩中）仏鬨は激しさを増す。

さあラン達プリキュアは、マールを破綻させ、衆生の盲た目を開き、住民参加自治・熟議型民主主義によって世界にあまねく光をもたらすことができるのか！ 決

め台詞は『女は読経!』

日曜朝八時半テレビ朝日系列、

『南無!プリキュア』

みてみてみてね!

——この項、これ自体がメタ的に親鸞になっている。imagine、想像して欲しい。四十過ぎの独身男性実家住まい、無精ヒゲ無精ハゲのむさい輩がプリキュアプリキュアと小声で呟きながら暗い自室でパソコンに向かっているこの様を。自然、あたたかなこころを持つ人であるならば思わず口をついて

南無 阿弥陀仏

と唱えてしまうだろう。

この湧き上がる慈悲心、惻隱の情。これこそが仏の光、阿弥陀の救い、本願である。私はそのためにこんなものを書いているのだ。これもまた、方便である。

ああ、光よ!

## 『隠蔽礼賛』

※ この項目は雑多な記述が羅列されています。簡潔な叙述を心がけましょう。

先日また軽やかにネット波乗りをして人生を浪費しておりますと、

「おいお前らすぐTV点けろ、『一九歳黒髪処女』が出てるぜ」

とある。もう小生もバカボンのパパを追い越した年齢であるからそんな程度では狼狽もしない、と震える指で慌ててリモコンを押すと、ちょうど画面に大自然の驚異的造形の黒髪の、おそらく人間、あるいはもしかすると女性ではないかと思わしき生命体が出ておられ、右手テロップに「山田花子（仮）さん一九歳」、どういふ不躰な問いに答えたものか下には

「処女です」

と出ていた。ハニカム笑顔が眩し過ぎて、目を背けながら急いでリモコンを押さざるを得ない。

誰も嘘はついてない。

たいへんモヤモヤした気分です。思い出すのは大江健三郎先生のことである。

かのノーベル文学賞授賞式、先生が奥様と、ご子息のピアニスト・光さんが演奏される姿を暖かく見守っておられたシーンは記憶に新しい。全世界が感動した。

実は先生には次男さんもおられる。

東大出の優秀な方で、授賞式中はご自宅でお留守番を務めておられた。

「秘すれば、花」

室町時代、今から六〇〇年も前には早くも世阿弥師匠がこのように喝破した。

なるほど我々は、生物として当然のことであるが、「見せる」ことばかり、「見える」ことばかりに意識が行く。つまり目に見えるものだけに価値があるという先入観があるが、このように「秘する」と価値が高まるコト・モノもある。

逆もまた真。

隠せばいいのに隠さずにガツクリくることもある。

小学生の頃、視力が落ち始めたので「視力回復トレーニング」的な書物を買って込

み、熱心に読んだ。読み終わって納得、ふと著者近影を見れば、先生はメガネを掛けておられた。

医師の徳目に「正直」は無い。

この頃のタイトルはもちろん、谷崎潤一郎先生の名作、『陰翳礼讃』のパロディである。先生は「暗がり」という本来マイナス・弱さに繋がることを逆に活用し、コントラストを強めることで「明」を更に際立たせる、これが日本の文化・芸術である、と卓見された。

我々は大動画時代に生きている。

日本のセクシー動画は質・量とも圧倒的に世界一だ。

この発展の原動力はどこにあるか。

隠蔽、つまりモザイクではないか。

インターネットでなんでも観られるご時世においてなお、日本のアダルトビデオは特定の部分が秘されている。

「公序良俗のため過激な表現を取り締まる」ための手段としては既に実効性が無い

のであるから、その存在理由はこれ、つまり日本古来の文化を引き継ぐ様式美、にあるに違いない。

そこに世界が夢中、文字通り夢の中、なのである。

思えば我々の世代は幸せだった。

ちょうど高校生になるかならないかの時にこのアダルトビデオという乳と蜜の流れる約束の地が出現し、しかし学生では借りられない。そこを何とか、ほうぼう駆けまわってチェックの甘いレンタル店を発見、なんとか手にしたビデオを観て、モザイクという名の隠蔽の向こう側に想いを馳せた。

隠されているからこそ、explorerしたくなる。

「ちよつとだけヨ」と言われれば相手が加藤茶でも覗き込みたくなる。

隠すから、見たい。

見たいという欲を掻き立てるために、隠す。

昨今の若年男子は「草食系」などと言われ性的関心の低さを嘆かれるところであ

るが、それは物心ついてそうしたことに興味をもった瞬間、インターネットを通じてなにからなにまで世界まる見えふしぎ発見！では情熱も渴望も生まれまい。

逆に言えばたいへん健全なことだ。そんなものは犬猫からインコ・ゾウガメでも野っ原でおおらかにやらかしていることであり、排泄や摂食同様、大自然の摂理に過ぎない。現に若年層の凶悪性犯罪（強姦など）は一九五〇年代・六〇年代とは桁外れに減っている。

— ということはいわゆる世代は不幸せなのか？

— わからなくなってきた？

— 昨今、企業はグローバル化し、日本文化や日本の伝統などにかまってはいられない。なんでも明け透け開け広げ、欠点も弱点も事前に告知して

— 「それでもよければお買い求めください、どう？ なんでも言っちゃう私達、正直者でしょ信頼して！」

— というような時代である。

— 当方もそのような通販業者からヌメ革のブックカバーを買ったことがあった。ウェブサイトには丁寧な、

「知っておいていただきませんが、あります」

などとあり、「革は色が変わります」「一品一品状態が違います」「ひよつとしたら予期せぬ色や模様が出るかもしれません」……ヌメ革製品好きでいくつも買って育てた経験があった私は「わかつてるわかつてる」と言わんばかりに手にした。

変化が尋常ではなかった。

ただの安物だった。

いろんなメーカーのいろんな製品を買った経験からして、およそ相場の半額だった。だから飛びついたわけだが、半額だけのことはあった。

つまり、「隠蔽しないことは素晴らしい」が、それと「品物が素晴らしい」には何の相関関係も因果関係もない。勝手に結びつけた私が悪い。

おそろしい時代である。

権謀術数が渦巻き過ぎている。

読者諸氏にお時間があれば、吉村昭先生の『戦艦武蔵』を読まれるがよい。太平

洋戦争に向け建造中の決戦兵器「武蔵」の秘密を守るため、人々は偏執狂的な努力をもつて隠蔽する。まるで隠蔽そのものが目的になっていくかのよう。

しかし完成した時点で既に時代は航空戦、巨大戦艦は無用の長物になっており、隠蔽の賜物「武蔵」はなんの役にも立たなかった。話はそれで終わらない。「武蔵」が無残な最期を遂げたあと、生き延びた乗組員達は「沈んだ」という機密を保持するため最前線へ放り込まれ、ほとんどが死んだ。

隠蔽はさらなる隠蔽を呼ぶ。

みなさんにも痛い経験があたりだろう。

……そういうことを考えても答えも出ないしあんまり意味は無いよ、と司馬遼太郎先生にやんわり叱られそうだが、なぜこんな隠蔽大好き！日本人！になってしまったのかボンヤリと考える。

個人的には「水に流す」から来ているのではないかと思う。

我々の日本列島は高温多湿、ほおつておくとすぐ物が腐る。腐ったら水に流す。

OK。

地震・津波・噴火・洪水・台風、自然災害大国である。有史以来これに寒冷地に

向いてないイネを無理矢理植えたことによる飢饉と、木質の住宅が密集することによる火事および落雷が加わる。

大災害が起きると、全部まつさらにリセットされて、水に流す。OK。

「隠す」は「バレる」とセットである。隠せば絶対にいつかバレる。消す・壊す・無くすなどと違つてそこにあるのであるから。隠したものがバレた時のダメージは、隠さずに明らかにした時の比ではない。

ではなぜそんな危険を冒すかといえば、「水に流す」という「バレようのない」選択肢に常に慣れ親しんでいたからではないか。

こういう隠蔽文化に子供の頃から親しんでいると、「隠す」ことそのものに魅力を感じる人種が生まれても仕方がない。

繰り返しになるが、隠されるからこそドキドキする・ワクワクする・興奮する、むしろそれを得たいからこそ、積極的に隠す……

と、思い出したのは日本ではなく、海外の例である。

何十年も屋根裏に愛人を「隠していた」有閑マダムが居た。そのうちに旦那が死んで二人は晴れて公認の関係となり、結婚した。が、すぐ離婚した。

これなど「愛のゆえ隠す」ではなく「隠すゆえの愛」であろう。

ということは、この「隠す」魅力は日本文化云々ではなく、むしろ人間の本性の何かに起因するのかもしれない。

霊長類研究の権威・松沢哲郎『想像するちから』に興味深い記述がある。

チンパンジーのメスは発情するとおしりが赤くなる。誰が見ても発情中カマン！というのが明らかなかわけである。ところが人間のメスは赤くならない。

これはどういふことかというのと、

「私をことごとく見えないと（他のオスと浮気して）他のオスの子どもの面倒を見るはめになりますわよ」

というオスに対するプレッシャーだというのだ。

なんと恐ろしいことであろう。

つまり人間は、おおげさにいえば、「隠す」ことによってサルから人間になった、と言つてもいい。

一夫一婦制の確立は「血統」を確定させ、「家」制度を成立させる。家制度は集

団の離合集散を柔軟にし、サルより遙かに大きな集団つまり「社会」を生む。社会が生まれれば役割分担が生まれそれは逆に家制度を補強し、ますます一夫一婦が強まる……というフィードバックが掛かったのではないか。

ここに至って、「包み隠すことなき」などということが人間には不可能であることが明らかとなった。

隠蔽は人間が人間であるために必要な所業であり、本能でもある。

世界中で今日も国家・組織・企業そして個人を問わず、隠蔽につぐ隠蔽が行われている。発覚時にダメージが増大するにもかかわらず、それがわかりきっているにもかかわらず。

そう、人間は隠蔽したくてしたくてしょうがない。そういう、いきものなのである。

むしろ無理に全てをオープンにさせようと圧力を掛ける方が、人心に悪い影響を与えるのではないか。「隠蔽したい」という抑えられた生理的欲求が、例えば浮気、例えば家族に黙ってFX取引、など、致命的な場面に噴出してしまっておそれがある。

TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）は秘密交渉である。理由は「交渉過程を開示すると各国内の反対運動に潰されてしまうから」。

意味がわからない。

国内世論の代弁者として他国と交渉するのが政府外交であろう。主従が逆である。人類はここまで「隠蔽」の正しい使い方を忘れてしまった。危機的である。

もはや隠蔽コントロールしかない。

どうでもいいものを隠すことで、たいせつなものは明らかにする。

twitter や Facebook などすぐ止めるべきだ。自己顕示欲を満たせば満たすほど、自己隠蔽欲が抑圧される。

隠そう。みんなで。

どうでもいいものを。

いな、

どうでもいいものをこそ。

この「隠蔽の再定義」ともいうべき社会運動に、我々日本人が貢献できる点は何か。

むろん、世阿弥である。

秘すれば、花。

歌舞伎を観よ。化粧と衣装と仕草があれば、中年男も絶世の美女だ。モザイクさえ掛ければ、その向こうにあるのは排泄器官近辺ではなく、パラダイスである。

隠せ、隠せ、隠せ。

見せたいところだけ見せろ。

見たいところだけ見よ。

ああそういうえばかりのアダムとイヴですら、知恵の実を食べていの一番にやったことといえはイチジクの葉の活用、すなわち隠蔽ではないか！

「近代」が隠蔽した「隠蔽したい」という人間の本能。これを取り戻すことが豊潤な人間性の回復に、一役も二役も買うのではないか。

イエス、隠蔽ルネサンス。

## 『撤退セヨ!』

当初この項は「キスカ島撤退作戦」をドラマ仕立てにしようと考えていた。都合よくキャプテン・イタクラこと不死身のサブマリナー・板倉光馬艦長が、老貴婦人・伊二潜を駆りこのミッションに参加している。彼の視点から大胆にして冷静な木村昌福司令率いる北方艦隊のパーフェクト・ゲームを描けば、これはおもしろいと考えた。(実際、三船敏郎主演で映画にもなっている)

が、描き始めると筆が進まない。

なぜかな、と考えてハタと気づいたのが、これは……後で言おう。

ご存じ無い方に前記作戦の概略をご説明しよう。できれば初見は、我が駄文ではなく司馬遼太郎『街道をゆく 四二巻 三浦半島記』にあるので、そちらを読んで感動されたい。「鎌倉とキスカ島」の項、八ページ少しなので立ち読みでいけるはずだ。さすがに『街道をゆく』ならまともな本屋ならば全巻揃えているはず。無い

書店は行く意味の無い書店なのでもう行かなくてもよい。なにからなにまでなんでも Amazon なのこの時代、書店の意味は「良質な書籍との意図せぬ出会いの場」しかない。その意志も意識もない書店は行かないことで潰した方が、そうした書店が生き延びる間接的力学になろう。

話が、逸れた（司馬風）

時は昭和一八年五月。帝国海軍は前年六月、ミッドウェー海戦で虎の子の正規空母四隻を喪い、明けて二月、ガダルカナル島を激闘の末奪い返された。連戦連勝を重ねた緒戦とは風向きが変わっており、体勢を立て直した米軍がその巨大な牙を剥き出しにし始めた時期である。

アリューシャン列島、シベリアからアラスカまで首飾りのように連なる島々、にも日本軍は何を思ったか進出していた。

アメリカは容赦なくこの諸島に襲いかかる。まずはアッツ島。日本はウラをかかれた。攻めてくるならアメリカに近いキスカ島だと、アッツには二六〇〇ほどの兵力しか無かった。四倍に及ぶ一〇〇〇人が、海空の豊富な援護を得て上陸、奮闘一七日も虚しく、守備隊は玉砕した。

次はキスカだ、と子どもでもわかる。

しかしアツとその周辺の制空権制海権を奪われ、キスカへの増援は事実上不可能である。

撤退か、玉砕か。

大本営は撤退作戦を検討、まず潜水艦部隊による輸送を試みる。ところが当地は常時濃霧に覆われる船の墓場、浮上しても天測ができれば船位がわからない。GPSなど無い時代、前記板倉艦長も「顔を出したら島まで一〇〇メートルだった」と肝を冷やした経験を語る。

しかも、米軍には最新兵器・レーダーがあつた。浮上した潜水艦をレーダーで捉えて狙い撃ち、日本は二度の輸送作戦で三隻の潜水艦を喪う。できたことと言えば、八〇〇人ほどの後送と、ほんのわずかな弾薬糧秣の補給。

島に残るは、五二〇〇人の守備隊。

ここに至つて木村司令は軽巡洋艦と駆逐艦を中心とした高速艦隊での、一気呵成の撤退戦を決意する。

しかし当地は、戦艦五、重巡洋艦五とも伝えられる大艦隊が海面を封鎖している

という。加えて近隣航空基地から爆撃機も飛ぶ。

木村は、濃霧を利用するしかないと考えた。霧に紛れて接近し、霧に紛れて離脱する。これなら少なくとも空襲は避けられる。低下する見はり能力を補うため、貴重な電探・逆探を装備する「島風」の配備まで頼み込んだ。

一度目の出撃、拠点・幌筵島から現地近くまで長駆するもこんな時に限って天候は晴れ。木村は作戦中止を決断、帰投する。

轟々たる非難、「突撃せよ!」「もう備蓄燃料がない」「季節が進むと晴れが続く」等が巻き起こるが、木村はのんびり釣りや将棋をして日を待つ。

数日後、気象台が遂に霧の予報を出す。

木村艦隊いざ出撃、あまりの濃霧に集合地点で接触小破する艦が続出するなど道中は困難を極めたが、なぜか会敵はせず、しかも湾内突入の瞬間だけ霧が晴れる、という異様な幸運にも恵まれ、わずか五五分で無事全守備隊の収容を完了、全速離脱により空襲圏も無事突破。

二度の出撃間、現地天候観測役として危険な任務にあつた板倉の伊二を始め各潜水艦も無事帰投、ここに世界戦史上極めてまれな、「完全無傷な撤退戦」が完成した。

あとでわかったことだが、ちょうど突入前夜、あまりの濃霧にリーダーに虚影が発生、それを日本艦隊だと思つた米艦隊は砲撃で弾薬を浪費、島に貼り付けていた哨戒役の駆逐艦まで全艦で一旦補給に戻つていた。その一日にピタリ、突入日が重なつた。

結局米軍はこの撤退に気づかず、八月に三四〇〇〇名もの大兵力で上陸を敢行、もちろんそこには人一人おらず、緊張による同士討ちが多発、守備隊軍医が悪戯に書いた『ペスト患者収容所』の看板にパニックになるなど、なんとも締まらない有様だつた……という余録も付く。

結果もさることながらあまりに都合のいい「偶然」がいくつも重なつたことも、これが「奇跡の作戦」と呼ばれる所以である。

奇跡と言えbaumう一つ。帰投中、闇夜のアツツ沖を通る際、各艦の乗員に、収容した守備隊の兵に、「声」を聞いたものが、多数居る。声はアツツからこう、聞こえた。

「ばんざい ばんざい」

と。

——さて。

この作戦が巷間に広まったのは終戦後の昭和三二年、元聯合艦隊参謀・千早正隆氏が『文藝春秋』に「太平洋海戦最大の奇蹟」というドキュメンタリを発表、これが大評判を取ったからである。これを読んで一番驚いたのは木村司令のご家族だそうで、この手柄話を一言も家族にしていなかった。木村司令の人柄が偲ばれる……

そうだろうか。

もちろんお人柄の良さを表すエピソードにも事欠かない木村司令だが（通商破壊戦で相手輸送船に乗員退去を命じてから撃沈する、戦闘中重傷を負うものの部下が掲げた「指揮官重傷」の旗を（護衛していた）「陸兵さんが心配するから」と降ろさせる、など）、僕はこのクラスの現場叩き上げの名将であるならば、もう一段高いレベルの判断ができたのではないかと勘ぐる。

つまりこの作戦自体、

「降伏すればいい」

という一言で終わる。

迫る米軍上陸部隊に白旗を掲げる手間ひとつで、守備隊は全員無事（他戦場に転用されず捕虜生活を送れる分、帰還するより兵にとつては良いかもしれない）、もちろん大切な艦隊はすべて無事、燃料も弾薬も使わなくて済む。ついでに、米軍にもなんの損害も出ない。

で、あるなら、この作戦は

「しなくていいこと」

であり、しなくていいことをいかに完璧にやったからといって、誇るものではないし、誇らしい気分も湧いてこないし、だから、語らない。

そういうことではないか。

つまり僕の筆が進まなかったのも、これが見事であり奇跡的であることは事実だとしても、それが「必要な奇跡」だったのかといわれると、首を傾げる。ここだ。

もちろん当時の発狂状態の帝国陸海軍が「戦わずして降伏」など許すわけがない、という「イメージ」もある。

しかし木村はこの作戦で「収容は陸軍兵からにします」（陸海軍半々ほど居た）

や、命より大切にせよと言われていた三八歩兵銃を投棄させる（收容作業を急ぐため。北方軍樋口司令は大本営に囚らず独断で了承）など、かなりの裁量がある。

もちろん記録には残らないが、あるいは「投降するのが一番早いのではないかな」ぐらいのことは、訴えたかもしれない。

であったとしても通らなかつたからこそ作戦が決行されたわけだが。

僕は戦争に関する書物を読むたび、ブログの感想文に「日本は戦争はしちゃいかん」と書き続けている。

理由はここだ。

いまの日本人には、なんの歴史的経緯か、「合理的な判断」ができない。

もう少し正確に言うると、重要な判断になればなるほど、「合理性」と「それでは語れない領域」の区別ができず、結果として合理的な判断が、できない。

戦争は究極の合理である。

強いものが、力のあるものが、勝つ。

ただそれだけのことでなんの神秘も無い。

いつか吹くと言われた神風は吹かなかつた。こんなものを「奇蹟」呼ばわりすれ

ば、また同じ事を繰り返す。戦後の木村はそう思つたのではないか。

当時のアメリカに喧嘩を売るといふ「勝利イメージ」の全く無い、今風に言えば「出口戦略」の無い戦いに国を挙げて突入することも非合理の極みならば、作戦単位で見てもこれのように、「合理性で押せばこうなる」という決断はなされない。

輸送船をその乗員ごとバアーシー海峡で沈められまくつても工夫なく送り続けたこと、戦艦大和を文字通り何一つ意味のない沖繩特攻に護衛の艦船ごと使い潰したこと、劣勢明らかかなガ島やインパールをいつまでもいつまでも止めなかつたこと、木村兵太郎の突然のラングーン放棄……合理性の欠如の実例には、枚挙にいとまがない。

そんな人々には、戦争はできない。

勝つ負ける以前の問題である。

「合理的判断の不可能性」という特性自体は裏返せば何かのメリットがあるかもしれないし、またもし治す（直す）ならば歴史の経緯を総点検して原因らしきものを抽出、そこに気をつけながら教育から社会システムから何かから変革していく時間と手間が必要だろう。

だから今はそれは問わない。

ただ、そのようであるから、高度な合理性が判断に必要と思われる事象に、首を突っ込むな、いな、突っ込んでもいいがせめて、せめて「あ、これはダメだ」と感じる事ができたらその瞬間、木村司令の強運と奇跡を当てにせず、撤退せよ。というのが、僕がこの項を呻吟しつつ考えたことである。

撤退は犠牲だけ出して得るものが無いように思われ、決断が難しい。

しかし実は、得るものはある。続けていれば喪われていただろう様々なリソース、時間・金もちろん生命、を保持できる。それにもまして「新しい可能性」、別の道を進むことで切り拓かれるかもしれない未来が生まれる。

「転進」という言葉は悪しき言い換え、現実の隠蔽として極めて評判の悪い言葉だが、「撤退」に抵抗があるのならそれこそこの言葉を復活させても良いと思う。

ダメだとわかったら撤退する。

こんなあたりまえのことすら、日本人はできない。

繰り返すがその事自体の是非や優劣、理由の詮索は今は置く。我々は、ダメだと

わかったことから撤退することができない人々、なのである。であるならば、そのように生きるしか無い。

問題は「ダメにしてしまう無能力」でも「ダメだとわからない愚鈍」でもない、「ダメだとわかってもやり続ける性癖」である。

四段重ね、

我々は、

ダメだとわかったことできえ、いや、

ダメだとわかったことをこそ、

辞めることができないという、

極めて特殊な性癖を持つ、

人々である。

偉そうに言ったが僕自身のヒストリの中にも

「ここで撤退しておけば傷ははるかにはるかにはるかに浅くて済んだ」

という事例がいくつもあり、いま思い出すと頭と心を掻きまわって熱を出して寝込む。

なぜ「やめる」という簡単な決断ができなかったのだ。会社なんてものなら二回も軽やかに辞めているのに。

ああ、おお、ああ……ホアーツ！

撤退セヨ！ 撤退セヨ！

青年よ、日本人よ、いな、万国の労働者よ。

近代という軛に繋がれし哀しき衆生よ。

兵士と工員と小役人を量産するための虐待に曝され続けた傷ついた魂よ。

撤退していいものからは、いな、「これ撤退したら何か言われちゃうかな？」という罪悪感を押し付けてくるような変なものからこそ（そんなものは間違はなく口でもないものだ）、大急ぎで撤退するのだ。

「諦めたらそこで試合終了ですよ」

終わらなければ次の試合は始まらない！

転進セヨ、撤回セヨ、後退セヨ、放棄セヨ、投降セヨ、退避セヨ、撤収セヨ、撤退、撤退、総員、撤退セヨ！

人生から撤退せぬために。

## ★ライノ

いつもお世話になっております、ながたです。お楽しみいただけましたか。

今回はちよつと文体を変えてみたところSky High、すこし高く飛べた気がする…

…

だいじょうぶですかー

【エスパール・ママ】

言うまでもありませんが完全フィクションです。事実は一欠片も入ってまフィクション！

【竜馬は生きている】

明治維新が言うなればエリート青年達のクーデターで、民衆が参加しなかった点に日本の最大の幸運と不幸がありますな。

列強に分割統治され文化伝統歴史全てを喪う大悲劇は避けられたものの、市民が革命を共有しなかったため「我々が社会を動かす」つまり民主主義という肌感覚は今に至るもまるで育ってません。

竜馬が眠れるのはいつの日か。

【プリキュア親鸞】

大好きなんですけど『プリキュア』はなんか変な作品で、過去作を延々マラソン視聴しながら思考錯誤した結果、気づきました。

我々が普段「いい」コンテンツと評価する際の細目要点方法論など、所詮後付の膏藥理屈に過ぎません。

【隠蔽礼賛】

書いてる最中にプロ野球の統一球問題が起きました。隠さなければ何の問題にもならないものをわざわざ隠す。これはもう楽しんでるとしか思えません。ほんとインペー大好きですよねワシら。

【撤退セヨ！】

『街道をゆく』で読んだ時から描きたかった「キスカ撤退戦」なのですが、なんか変なことになりました。Wikipediaにも作戦や木村昌福司令について記述あります。ぜひ。

アツツの英霊に敬礼。

お読みいただき感謝感激「Thanks 謝謝」、また会う日まで「オ・レ！」

## ●参考文献

- ・安富歩・本多雅人・佐野明弘『親鸞ルネサンス 他力による自立』
- ・安富歩『マイケル・ジャクソンの思想 第二回 Billie Jean なぜマイケルは、ムーンウォークをしたのか?』（「雑誌『ERIS』第二号」収録）
- ・松沢哲郎『想像するちから』
- ・司馬遼太郎『街道をゆく 四二 三浦半島記』
- ・板倉光馬『あゝ伊号潜水艦』

## ■おくづけ

『撤退セヨー!』

作者 ながたかずひち

発行日 2013.8.11

mail [nagata@mti.biglobe.ne.jp](mailto:nagata@mti.biglobe.ne.jp)

web <http://rakken.net/>



**Evacuation!**  
**Powered by Kazuhisa Nagata**